

## 天草の沿革

4世紀中	成務 5年	天草国 <sup>くにのみやつこ</sup> 造 <sup>たてしままつのみこと</sup> に建島 <sup>あまのぶたや</sup> 松 <sup>あまのぶたや</sup> 命 <sup>あまのぶたや</sup> 任命される 「先代旧事本記」
712	和銅 5年	古事記に両児の島 <sup>もつかん</sup> 天 <sup>あまのぶたや</sup> 両 <sup>あまのぶたや</sup> 屋 <sup>あまのぶたや</sup> 島 <sup>あまのぶたや</sup> の名がある
743	天平15年	筑紫館跡から木簡 「肥後国天草志記里」 出土
744	天平16年	続日本記に肥後国天草の名がある
885	仁和元年	「和名類聚抄」には「肥後国安万久佐郡に波太. 天草. 志岐. 恵家. 高屋の五郷あり」と記してある
941	天慶 4	弘法大師の法孫妙覚法印が本砥郷山口で蘇迷嶽観音院（真言宗）を開基
1260	文應 元	大蔵太夫（播磨局）亀川に来迎寺を建立
1313	正和 2	一町田に信福寺（天台宗）開山
1340	興国 元	蘇迷嶽観音院（真言宗）に無外禅師が入山
1555	弘治元年	天草5人衆時代
1587	天正15	豊臣秀吉の九州平定後、肥後南半分を小西行長が支配
1589	天正17	蘇迷岳観音院（真言宗）が小西行長の兵火を浴び全焼
1600	慶長 5	天草は加藤清正の領となる
1603	慶長 8	天草は、唐津城主 寺澤志摩守広高の領地となる
1637	寛永14	天草島原の乱
1639	寛永16	備中国（岡山県）山崎家治の領地となる
1641	寛永18	幕府天草を天領（10年間）とし鈴木重成を初代代官に任命
1654	承応 3	二代目代官鈴木重辰就任
1664	寛文 4	私領復活統治 三河国（愛知県）の戸田忠昌支配
1671	寛文11	第二次天領（43年間）となり小川藤左衛門正辰など8代支配
1672	延寶 元	染嶽観音院の草庵として〔慈眼庵〕を建立
1685	貞享 2	服部六左衛門三正支配
1703	元禄16	染嶽観音院を代官今井九右衛門により黄檗宗として再建
1714	正徳 4	天領委任統治 日田役所支配 室七左衛門重福代官など21代
1720	享保 6	島原領所支配 松平忠雄兼帯
1725	享保10	染嶽観音院（曹洞禅宗）再興
1749	寛延 2	島原領所支配 松平忠祇兼帯
1750	寛延 3	島原預所支配 戸田忠盈兼帯
1769	明和 6	日田西国郡代支配 揖斐政復兼任
1770	明和 7	染嶽観音院を再興 東向寺門末とする（東向寺10世泰梁慧貞）
1774	安永 3	天草、最初の大規模な百姓一揆
1777	安永 6	日田西国郡代支配 揖斐靱負兼任
1783	天明 3	島原預所支配 松平忠恕兼帯
1789	寛政 元	瑞岡珍牛（48）長州より帰山し染嶽観音院へ入る
1793	寛政 5	島原預所支配 松平忠馮兼帯
1832	天保 3	日田郡代支配 監谷正義兼任
		10 長崎代官支配 喬木忠篤兼任
1847	弘化 4	天草は日田大官 竹尾清右衛門の領有となる
1848	嘉永 元	池田岩之丞兼任

1862	文久	2	長崎代官高木作右衛門（健太郎）兼任（島原長崎78年間）
1863	文久	3	日田郡代支配 屋代増之助兼任
1867	慶応	3	窪田治部右衛門が郡代支配
1868	慶応	4	廃藩置県により熊本県天草郡となる
		4	天草郡は富岡県となる
		6	天草県となる
1868	明治	元	天草は長崎府に併合
1869	明治	2	長崎県の管轄
1871	明治	4	11 府県統合により天草は八代県に所属
1873	明治	6	肥後国全体を白川県とし、天草は白川県に編入
1876	明治	9	白川県を熊本県と改める

### 乱から明治キリスト教復活まで

乱後、天草島は幕府の直轄地となったが、江戸時代を通じて専任の代官がいたのは通算して僅か66年である。

島原藩預かりとなり、島原藩の一部として行政された期間が78年、長崎代官の兼任となった期間50年、実に128年間は長崎・島原に所属した。

### 私領

1638年(寛永15) 唐津城支城富岡城々主として備中国成羽から山崎甲斐守家治就封。(3年間)

1640年(寛永17)まで天領

1641年(寛永18) 天草は天領となり、初代々官鈴木重成就任。(13年間)

1653年(承応2)まで天領

1654年(承応3) 二代目代官鈴木重辰しげとき就任。(10年間)

1663年(寛文3)まで私領

1664年(寛文4) 天草は再び私領となり、三河国田原城から戸田伊賀守忠昌就封。(7年間)

1670年(寛文10)まで天領(専任)

1671年(寛文11) 第2次天領時代(専任代官を置く)。小川藤左衛門正辰など8代に亘る。43年間1713年(正徳3)まで

### 天領(委任)

1714年(正徳4) 第3次天領時代。日田代官室七左衛門重福など21代に亘る委任統治となる。

幕末の日本は、開国攘夷か、佐幕か尊皇かで揺れる。こうした時の1864年3月、天草の代官兼任になったのが西国郡代(日田)窪田治部右衛門。そして、1868年明治を向かえる。154年間1867年(慶応3)まで(この年、15代将軍徳川慶喜が大政奉還)計230年間

こうした歴史的な理由から明治元年維新政府になってから、長崎府に併合され長崎県天草郡であった。天草が、八代県の所属になったのは明治4年11月、6年白川県の所管となり熊本県天草郡となったのは明治9年である。

天草人の海外発展の萌芽は江戸時代末期から見られる。長崎を中心に肥後、筑前へ人夫・人足かせぎに多くの人が出かけている。天草人の出稼ぎの中で、天草女性の海外進出が「娘子軍」と呼ばれ、またからゆきさん(唐の國)と取り沙汰された。確かに、明治20

年前後から海外に出かけ、その後、第2次世界大戦勃発まで続いた。地域もアジア全域、南北アメリカ、アフリカ大陸までその足跡をしるしている。

幕末にフランスのパリ外国宣教師会の宣教師が、日本に入国したのは、1859年（安政6）で、初めはフランス外交官の通訳としてであった。

間もなく宣教師たちは、函館と横浜で布教を開始、明治初年においても長崎は基督教の拠点であった。天草島の潜伏キリシタンの所在を探知していた長崎港外の「神の島」から、信者の漁師が旧キリシタンの親族を探す目的で大江村にきた。大江村の野中地区の道田徳松夫婦、弟の嘉吉が信者になって基督教が復活した。

その後、山一つ越えた崎津にも入信者が出て、この二つの地区に基督教が根をおろした。明治中期になっても両地区あわせて千人近い転宗者を出した。

#### 参考文献

天草島鏡 天草寺社領之覚（上田宜珍）

天草近代年譜（松田唯雄）